

PONARTY
TARUMAE ARTY PRESENTS ART PAPER MAGAZINE

文化を紡ぐ。



リアス・アーク美術館学芸員 山内 宏 泰



東日本大震災から6年の月日が経とうとしている。時間の流れにあらがうことは、容易ではない。被災地以外に暮らす人々が当事者意識を持って震災と向き合うことは、どんどん難しくなっている。

昨年春、宮城県気仙沼市にある「リアス・アーク美術館」で行われた若手作家を紹介する企画展に、樽前arty+の代表理事・藤沢レオも参加した。リアス・アークは、運営母体である気仙沼市と南三陸町の震災被害を記録する役割を担い、学芸員が津波に飲み込まれた街を歩き、写真を撮り、水や泥に漬かった日用品を拾い集めた。その3万点にも及ぶ記録の一部を2013年から常設展示している。

リアス・アークの学芸係長、山内宏泰さんとの交流が深まり、樽前arty+は1月21日、苫小牧市立中央図書館で山内さんを招いた講演会を開いた。講演の演題は「文化を紡ぐ。」文化的な視点で震災を問い直した。



約50人が来場した講演の冒頭で、山内さんは、こう語りかけた。

「震災の話が、『文化を紡ぐ』といった内容へとつながるのか、皆さんは不明だと思います。多くの人は震災を不可抗力の自然現象による災害と認識している。ですが、一般に自然災害と言われているものが、実は多くの人災的側面を持つ、文化的出来事なのです」

大津波の被害の拡大の背景に、災害や都市開発の地域史が関係しているという。

気仙沼は豊かな漁業資源を生かした経済発展を目指し、戦後、河口の砂州などを埋め立て、市街地を拡大した。水産加工場などが集積し、岩壁が整備され、石油コンビナートが立地し、港湾都市に変貌した。東日本大震災では、このような造成地で甚大な被害が生じたという。

近代以降、三陸沿岸には津波が何度も押し寄せていた。だが、気仙沼の中心部に大きな被害はなく、「気仙沼は半島と島に守られている」という市民の解釈が一般化したという。

1960年(昭和35年)のチリ地震津波では気仙沼市で2人の行方不明者が出て、市街地の大規模な浸水も経験した。だが、当時は「チリ地震津波特別措置法」により防潮堤、防波堤、津波水門などの防災施設の整備が災害対策として促進され

た。津波は防ぐことが可能との前提で、気仙沼の埋め立て地周辺でも開発が逆に加速したという。

山内さんは言う。「経済性を最優先とし、いわゆる防災という考え方を基本に繰り返されてきた防災構造物の建設や、それを前提とした沿岸部の埋め立てや開発といった歴史上の行為。その結果が、東日本大震災における気仙沼の被害拡大に根深く関与しているということです」

ここで、文化的な視座が求められるという。山内さんは続けた。

「東北地方太平洋沿岸部は頻りに津波が襲来する津波常襲地域です。日々繰り返される生活の諸事象が記憶、蓄積され、暮らしの型として定着すれば、それは文化となります。文化は日常生活の文化的昇華によって形成されます。文化的昇華とは、その場における気候風土が織りなす諸現象が人間の日常生活に深く織り込まれ、無意識のうちに固定化され、習慣や行為として安定し、建造物等にも具現化されていく状態のことです」

「近代以前、気仙沼周辺に暮らす地域住民が、気候風土に基づいて築き上げてきた文化は、津波襲来に対して脆弱ではあったものの、それゆえ自然に対する『畏れ』の意識を失うものではありませんでした。しかし、国家が示す画一的な方針に則って行われてきた戦後の開発は、地域住民に代々受け継がれてきた風土感覚を希薄化させ、同時に『畏れ』の意識も薄れさせました」

「我われは三陸沿岸部に生きる上で必要不可欠な津波に関する知識や経験を文化的に継承できていませんでした。ゆえにあのような大被害を招いてしまいました。裏を返せば、科学技術がどれほど進歩し、防潮堤などの防災設備がどれほど整備されようとも、日々の暮らしを営む人々の文化的成長、成熟がなければ大災害は繰り返されるということです」

そうした考察から、山内さんは津波の防災対策ではなしえなかった減災を可能にする基本的指針を見いだした。「それは『津波を受け入れ、津波とともに生きる地域文化を育むこと』です」。その指針を具現化したのが、リアス・アークの常設展示である。

震災からわずか5日後に山内さんらが始めた独自の記録調査活動は、すぐに同

館としての任務に切り替わった。デジタルカメラと住宅地図を手に、水没し、あらゆる建物が倒壊した街を歩いてカメラを向けた。その写真や水や泥に漬かった「被災物」を収集した。その活動は約2年間続け、2013年に常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」として公開を始めた。

凄惨な被災状況を撮影した写真には記録としての価値が当然あるが、それだけにとどまらない。撮影者の長文のキャプションを添えた。現場にしか残らない記憶をつづっている。

例えば、水産会社の冷凍庫で解凍されてしまったサンマを写した1枚とそのキャプション。「二重にマスクをしても気絶しそうなほど強烈な悪臭だ。体が震えだし、身の危険を感じた。しばらくサンマが食べられなくなった」

例えば冠水した路地に建物が映り込む様子を伝えた1枚。「ヴェネツィアでもない限り、こんな光景は通常目にしないものだ。毎日、壊滅した町を歩き、耐えがたい無残な風景を見続けていると、こんな光景に美しさを感じるようになる。一瞬でも『美しい』と感じられる『精神の救済』を求めているのだと思う。心が美しいものを欲しているのだ」

山内さんは、こうしたキャプションの意義を説明した。「我われが撮影した写真には、撮影者が現場で得た感情も思考も映し出されていない。写真は光学的な光の羅列であり、撮影者が体感した身体感覚と同一ではない。我われが伝えようとする情報は、現場に立った人間が味わった感覚や思考である。これを伝えるため、展示写真の全てに撮影者自らが執筆した文章を添えている」

そして、被災物の展示には、その物にまつわるストーリーを添えて紹介する表現を用いている。

さび付いた足踏みミシン。「足踏みミシンなんて、若い人は知らないでしょうね。昭和35年ころに買ったものだね。長男が小学校さ上がって…。そんな時に買ってね。雑巾だのも縫ったけど、洋服も作ったね。二男がね、3歳くらいで、足踏み台に乗って、ゴコゴコ揺らして遊ぶのね。ケラケラ笑って。動かなくなって、新しいの買って、お父さんは捨てるって言ったけど、子供たちが小さい時の思い出があるから、わたしは捨てられないの。わたしにとってはね、ただの台でもいい

の。宝物だったの…」

傷ついた旧式の炊飯器。「平成元年ころに買った炊飯器なの。じいちゃん、ばあちゃん、わたし、お父さんと息子2人に娘1人の7人だもの。だから8合炊き買ったの。それでも足りないくらいでね。今はね、お父さんと2人だけど、お盆と正月は子供たち、孫連れて帰ってくるから、やっぱり8合炊きは必要なの。普段は2人だけど、夜の分まで朝に6合、まとめて炊くの。裏の竹やぶで炊飯器見つけて、フタ開けてみたら、真っ黒いヘドロが詰まっていたの。それ捨てたらね、一緒に真っ白いごはんが出てきたのね… 夜の分、残してたの… 涙出たよ。」

ぼくとつな東北なまりで、山内さんが物語を読み上げた。聴講者が息をのむ感覚が、講演会場を包み込んだ。

被災物という言葉は造語だ。一般的には「ガレキ」と称される。山内さんは『「ガレキ=不要なゴミ』と呼びますが、我われは一被災者として、ガレキという言葉は使用しないこととしています』と語る。被災物、一つ一つに生活者の記憶が宿るからだ。

展示した被災物に添えた物語は、被災者の証言による記録ではない。創作である。あの大震災を公的な機関がフィクションを交えて表現することに、批判があるかもしれない。なぜ、そんな手法を選んだのか。山内さんは解説する。

「想像を交えて創作された物語は客観的な資料価値を有していません。しかし、震災発生以降、被災地外から訪れる多くの来訪者が、『想像もできない』と語る状況を鑑み、私はあえて『想像を補助するもの』としてこの資料を提示しています。特定できない個人を想定し、その個人が被災物に宿る記憶を語るという演出には、被災物を普遍的な存在にする目的があります。不特定の個人をイメージするためには、自分に身近な誰か、あるいは自分自身を語り手として仮想せざるを得ません。それによって観覧者の当事者性が無意識に覚醒することを狙った手法です」

リアス・アークのスタッフ自身が被災者として経験した感覚、美術館として蓄積してきた表現手法。あらゆる記憶が重なり合い、醸成された気仙沼地域の文化を可視化した構成が、観覧者の想像力を刺激し、震災の当事者感覚を呼び起こし

ている。

震災から6年。被災地では巨額の予算が投じられ、ハード面を中心に復興事業が進められている。山内さんは、そんな現状に「新たな価値観が必要」だと言う。

「現在行われている被災地復旧、復興事業は自然災害の原因を一方的に自然現象に押し付け、人間側の問題を棚上げした考えが基本とされています。ゆえにその発想は原因となる自然現象を跳ね除ける構造物の建設という形で具現化され、防災、災害復興という旧来の思想を未だに踏襲しています。かつては無知ゆえに自然を侮り、ヒューマンエラーを蓄積してしまいましたが、現在は多くを知った上でなお、その過ちを強引に繰り返そうとしています。その先導者たちが根拠としている法制度は、日本の近代化を推進するために整備されてきた旧来の価値観であり、現在必要とされている創造すべき未来の価値観とはかけ離れた古い思想に裏付けられています」

そして、日々繰り返される生活を礎として積み上げられた文化の必要性を強く訴える。

「私は文化というものを、織り上げられた1枚の布のようなものとイメージしています。『土地の気候風土、自然環境から縦糸を紡ぎ、日々積み重ねられる人々の暮らし、日常から横糸を紡ぐ。それらが織り上げられて文化となる』。そのようなイメージです」

「東日本大震災によって被災した私が、気仙沼地域で発見した様々な問題をこのイメージに当てはめてみれば、我われは震災発生以前から、重要な縦糸のほとんどを、すでに失っていたこととなります。横糸を織り重ねているつもりでしたが、それはバラバラの繊維、糸にすらなっていませんでした。そして、織り機だと思って頼ってきた制度は、布を織り上げてはいませんでした。結束力の無いトイレットペーパーのような状態で浮遊していた地域の記憶は、津波によって繊維にまで分解され、洗い流されてしまったかのようです」

「我われはまき散らされてしまった繊維を拾い集め、それを紡いで横糸を再生しようとしています。そして、縦糸については、改めて気候風土、自然環境から素材を探り直していかなければなりません。さらに、その糸をどのように織り上

げればよいのか、新たな織り方、生き方を考案しなければなりません」

講演の最後に、苫小牧市民への投げかけがあった。

「皆さんが暮らす苫小牧には無関係な話だったでしょうか？ 苫小牧の文化を、私はほとんど知りません。しかし、近代以降の歴史は薄っすらと認識しています。苫小牧にとっての縦糸、横糸、そしてそれを織り上げる織り機は正しく機能し、耐久性のある、美しい布を織り上げているのでしょうか？ 我々のような、愚かな状態に陥らないために、改めて、日常の暮らしに目を向け、そのあたりのことを検証してみたいと思います」

苫小牧だけへの問題提起ではない。海があろうが、なかろうが、どんな地域でも積み上げられてきた文化を、おろそかにしていないだろうか。困難に直面した時、地域に築かれた文化が内包する真理が、未来への道標となる。その意味を山内さんは、被災地から問いかけている。

山内 宏泰

- 1971年 宮城県石巻市生まれ
宮城教育大学中学校美術教員養成課程卒業
1994年～リアス・アーク美術館（宮城県気仙沼市）学芸員。
美術家。専門は現代美術、造形理論、地域文化研究、災害史研究など
同館常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」編集
美術家として個展、グループ展など多数
また舞台美術家、舞台衣装家として多数の舞台に参加
2013年 気仙沼市東日本大震災伝承検討会議委員
2014年 気仙沼市東日本大震災遺構検討会議委員

【受賞歴】

2004年 平成15年度宮城県芸術選奨新人賞受賞（美術・彫刻）

【著書】

- 2006年 『読む美術館』リアス・アーク美術館・2006.4
2008年 『砂の城』近代文芸社・2008.10 / 山内ヒロヤス
2014年 『東日本大震災の記録と津波の災害史』リアス・アーク美術館・2014.3.15

PONARTY

文化を紡ぐ。 山内 宏泰

住 所 / 苫小牧市字樽前 114

ホームページ / tarumae.com

発 行 日 / 平成 29 年 3 月

発 行 所 / NPO 法人樽前 arty プラス

発行責任者 / 藤沢 レオ

装 丁 / 堀米 和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。